

中学生のネット使用が孤独感・ソーシャルサポートに与える影響(2) -目的別ネット使用のポジティブ効果-

安藤玲子¹・高比良美詠子²・坂元章¹

(¹お茶の水女子大学・²メディア教育開発センター)

問 題

近年、子どもがインターネット(以後、ネット)に触れる機会が増大し、その心理的影響についての関心が高まっている。

従来の調査(Kraut et al., 1998)では、ネット使用の孤独感などへの悪影響が指摘される一方で、ネット使用により孤独感が減少し、ソーシャルサポートが高まるという効果(Shaw & Gant, 2002)も示されており、見解は一致しておらず、子どもを対象とした研究も少ない。

筆者らは、小学生を対象とした研究で、ネット使用が攻撃性などに悪影響を持つ一方で、友人関係の孤独感を減少させる可能性を報告した(安藤ら, 2003)。この研究を踏まえ、本研究では中学生を対象に、小学生でポジティブな効果がみられた友人関係の孤独感への影響について検討を行う(攻撃性などへの悪影響については、高比良らの別稿参照)。

また、本研究では、家族や教師、友人などの身近な他者からのソーシャルサポートについても検討する。コミュニケーションツールとして有用なネットが、ソーシャルサポートの拡大に関与する可能性があると思われるからである。更に、友人については、ネット上で知り合った友人と、対面で知り合った友人(以後、オフの友人)とを分けて検討する。

なお、本年度の日本健康心理学会で報告したツール別のネット使用の効果に続き、本稿では使用目的別のネット使用の効果について検討する。

方 法

調査対象

神奈川県の中立市立中学校2校の2年生に2波のパネル調査を実施し、両時点で回答した298名(男子155名、女子143名)を分析対象とした。

調査項目

目的別ネット使用量 学校の授業、宿題や勉強、好きなことを調べる、ネット上で出会った友人とのやりとり、家族やオフの友人とのやりとり。新しい友達をつくる、などの目的での1週間のネット使用の総使用時間を「やっていない」から「3時間以上」の7件法で尋ねた。

友人関係の孤独感 異なった関係における孤独感尺度(広沢ら, 1984)の友人関係因子10項目を4件法で用いた。 α 係数は.80であった。

ソーシャルサポート 身近な他者からの情緒的サポートを測定する学生用ソーシャルサポート尺度(久田ら, 1989)から、中学生が経験すると考えられる13項目に、勉強で生じた疑問への援助など2項目を追加して15項目を用いた。それぞれの項目に「家族、学校や塾の教師、ネット上の友人、オフの友人」の4種類の他者が、どの程度サポートしてくれているかを、4件法で尋ねた。

結 果

目的別ネット使用量

はじめに、1時点目における目的別ネット使用量の平均値と標準偏差を表1に示す。

表1 目的別ネット使用量の平均値と標準偏差(1時点目)

	<i>M</i>	<i>SD</i>
目的別ネット使用全体	4.57	4.98
授業のため	1.26	1.51
宿題や勉強のため	0.64	1.13
好きなことを調べるため	1.86	1.89
ネット上の友人とのやりとりのため	0.33	1.14
家族やオフ友人とのやりとりのため	0.33	1.04
友だちや知り合いをつくるため	0.20	0.90

ネット使用が友人関係の孤独感に与える影響

次に、共分散構造分析を用いネット使用が友人関係の孤独感に与える影響について検討した。分析には交差遅れ効果モデルを用いた(図1)。このモデルで、例えば1時点目の友達作りのためのネット使用量から、2時点目の友人関係の孤独感へ

のパスaに有意な負の効果を持つなら、友達作りのためのネット使用の増加により、友人関係の孤独感が低下するという因果関係が推定できる。

分析の結果、どの目的でのネット使用からも、友人関係の孤独感への影響はみられなかった。

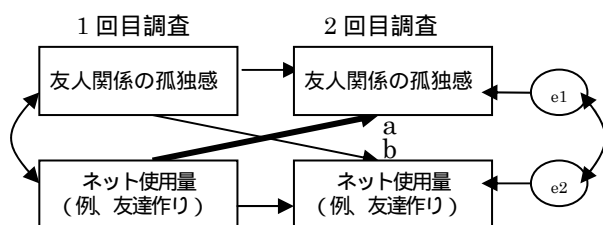


図1. 交差遅れ効果モデル

ネット使用がソーシャルサポートに与える影響

同様の分析モデルを用いて、ネット使用のソーシャルサポートへの影響を検討した。

その結果、好きなことの調査、ネット友人とのやりとり、友人作りなどの目的でネットを使うほど、身近な他者全体から受けるソーシャルサポートが増えていた。また、授業および家族やオフの友人とのやりとり以外の目的でネットを使うほど、ネット友人からのソーシャルサポートが増え、好きなことを調べるためにネットを使うほど、オフの友人からのソーシャルサポートが増えていた。

考 察

中学生を対象とした本研究では、小学生で見られた宿題や勉強のためのネット使用(安藤ら, 2003)からも、他の目的の使用からも友人関係の孤独感への効果は見られなかった。これは、中学生が小学生ほど友達と一緒に勉強しないためと考えられる。しかし、対人的な使用など、孤独感の軽減に有効と思われる使用法で、なぜ効果が見ら

れないのかなど、更に詳細な検討が必要である。

ネット友人からのソーシャルサポートへの効果についてみると、ネット友人とのやりとりや友達作りなど、ネット上の対人関係への積極的なネット使用がネット友人からの援助を増やすという結果はもっともらしく見える。一方、勉強目的の使用でその効果が得られるという結果は、中学生は、勉強で疑問が生じると、ネット上の友人に援助を求めることを示すのかもしれない。子どもがネット上の友人にどのような援助を求めるのかについてのより詳細な検討が必要である。

次に、オフの友人からのソーシャルサポートへの効果をみると、ネット友人での効果と比較してネット使用の効果は小さかった。家族やオフの友人とのやりとりのためのネット使用がオフの友人からの援助を増やさなかったという結果は、本研究で扱ったネット使用量がパソコンを用いたネット使用に限定しているために生じた可能性がある。携帯電話の普及に伴い、中学生は、オフの友人とのやりとりに、むしろ携帯電話を利用することも考えられるため、更に検討が必要である。

引用文献

- 安藤玲子・高比良美詠子・坂元章 2003 ネット使用が精神的健康および社会的不適応に与える影響(2) 日本社会心理学会第44回大会発表論文集, 622-623
- Kraut, et al. 1998 Internet paradox: A social technology that reduces social involvement and psychological well-being? *American Psychologist*, 53, 1017-1031.
- 広沢俊宗・田中国夫 1984 異なった関係における孤独感尺度の構成 関西学院大学社会学部紀要, 49, 179-188.
- 久田満・箕口雅博・千田茂博 1989 学生用ソーシャル・サポート尺度作成の試み(1) 日本社会心理学会第30回大会発表論文集, 143-144
- Shaw, L. H., Gant, L. M. 2002 In defense of the Internet: The relationship between Internet communication and depression, loneliness, self-esteem, and perceived social support. *CyberPsychology & Behavior*, 5, 157-171.

表2 目的別ネット使用量から友人関係の孤独感およびソーシャルサポートへの効果

	ソーシャルサポート				友人関係の孤独感
	全 体	家 族	教 師	ネット友人	オフの友人
目的別ネット使用全体	.13**			.24***	.10 [†]
授業のため		.07 [†]			
宿題や勉強のため				.15**	
好きなことを調べるため	.11*			.10 [†]	.13*
ネット上の友人とのやりとりのため	.12**		.08 [†]	.33***	
家族やオフ友人とのやりとりのため					
友だちや知り合いをつくるため	.12**		.07 [†]	.37***	

注: ここでは、有意な効果・傾向がみられた場合の数値のみを示した。*** $p<.001$, ** $p<.01$, * $p<.05$, [†] $p<.10$